2012年沖縄インバウンドに注目

～訪日旅行でも質の高い沖縄観光を目指す～

沖縄観光コンベンションビューローは、2月25日から2月29日まで、中国の上海を含む周辺の揚子江デルタ地域から中国メディア関係者を招へい。今回の事業は日中旅游ビジネス情報センターが提案する「中国人ホワイトカラー層の訪日旅行市場拡大」が目的。実施には観光経済新聞社も協力。取材内容は上海を中心に中国のメディアで紹介される。今回の沖縄特集では、沖縄の今回の招聘事業の内容を中心に沖縄のインバウンドの取り組みを紹介。あわせてアクションプラン「2012年度ビジットおきなわ計画」案の内容を紹介する。

中間層以上を対象とした沖縄観光モデルコースを中国メディアが取材

主な視察行程

取材と視察行程は、「中国人ホワイトカラー層の訪日旅行市場拡大」を目的に、モデルコースを設定。中国のホワイトカラーの日本への旅行ということで、旅行費用は大人ひとり10万円～12万円程度。日程を3泊4日から4泊5日のモデルコースを設定。沖縄で人気の高い、満足度の高い観光地やホテルを選んだほか、自由時間も設定。今回は自由時間内に中国メディア側から希望のあった沖縄の伝統工芸、自然保護活動、観光施設やホテルの担当者へのインタビュー取材を実施。最終日には、沖縄観光コンベンションビューロー内で、安里会長を交えて意見交換会が行われた。

岡本義正・日中旅游ビジネス情報センター代表は、「中国から日本への旅行のビザ発給が緩和されたが、全体的に期待以上の数が訪れていない。これは現在の中国人観光客にとって日本の観光旅行の内容が魅力的でないのが要因のひとつと考えている。同時に中国メディアに適切な情報発信が行われているかどうか疑問もある」と今回の提案事業の内容について説明する。

一行は、2月25日に中国東方航MU2149便で上海13時30発那覇16時30分着。帰りは29日に中国東方航空MU2150便で那覇17時30分発、上海18時30分着。25日は、ダイワロイネット沖縄国際通りに宿泊。宿泊は、行程上移動中心の25日は国際通りのシティホテルを利用。本格的な行程が始まる26日、27日は、沖縄を代表する大型シティホテルの沖縄ハーバービュークラウンプラザに連泊。28日は西海岸のリゾートホテルで、沖縄のホテルで高い知名度を誇るANAインターコンチネンタル万座ビーチリゾートを利用した。

ツアーの実現性を高くするために、平日にインとアウトする行程で、宿泊費用を抑えるためにリゾートホテルは平日に宿泊するようにした。今回の行程の場合なら、シティホテルもトップクラスの利用なので、予算としてはリゾートホテル2泊も可能であったが、自由時間の取材の都合もあり、大型シティホテル2泊にしている。

2月26日行程

26日は、早朝、沖縄本島から出発のホエールウオッチングを取材。1月下旬から2月の沖縄であれば90%の確率で観賞できるといわれる。また世界の観光地と比べても沖縄のエメラルドグリーンの海で見るクジラは、迫力と美しさの両方を楽しめる。クジラも一頭でなく数頭見られる。今回の取材で、感動した中国メディア関係者は3月早々にホエールウオッチングをメーンにした沖縄の記事を掲載した。沖縄観光コンベンションビューローでも、全国的にホエールウオッチングは困難な観光と思われているが沖縄の場合は、1月下旬から2月なら容易に観賞できる。もっと国内観光客にも来てもらいたい観光スポットと話している。

次は昼食と休憩、チェックインも兼ねて、沖縄ハーバービューホテルクラウンプラザに移動。午後からは世界遺産首里城を見学。その後、首里にある工芸品の取材としてサンゴ染めを体験。珍しい自然のサンゴを使った染物の技法で実際の体験も行った。夕方からは、沖縄料理、琉球、宮廷料理、琉球舞踊の取材と夕食を兼ねて、沖縄料理の老舗「四つ竹」の久米店へ。

2月27日行程

2月27日は、西海岸と沖縄北部の取材。午前中にプセナリゾートで、グラスボートと海中展望塔を取材。昼食は高級リゾートホテルのプセナテラス内のカジュアルな中華料理のレストラン。午後からは海洋博記念公園で、沖縄で開催されている春のイベント「花のカーニバル」と世界最大級の水槽で知られる美ら海水族館を見学。その後、屋我地島の自然保護活動として、マングローブの植樹を見学。このマングローブには、中国人留学生が植樹したものもあり、熱心な取材が行われた。

夕方から、那覇新都心に移動し、大型免税店のDFSギャラリア・沖縄を取材。関心が高かったのは女性は化粧品で、自然素材を使ったもの。男性は、高級ブランド時計。2商品とも専用の売り場ゾーンが設けられており、外国人観光客のニーズに応えた売り場となっていることが分かった。夕食は那覇新都心で繁盛しているといわれる一般的な飲食店でとる。岡本氏や、中国側のコーディネーターを務めた上海中国青年旅行社の羅氏からは、沖縄の場合は、ホテルや観光施設内の食事メニューの方が価格と内容のバランスがよくリーズナブルであると感じたという。

2月28日行程

28日は午前中が、テーマパークのおきなわワールド。鍾乳洞や国の有形文化財の古民家、スーパーエイサーといったおきなわワールドのメーンのアトラクションのほか、琉球ガラスや三線などの伝統工芸品を取材。中国には残っていない古代中国文化の影響が残っている部分に大きな関心が寄せられた。また、お目きなわワールドは、日本国内をはじめ、海外からさまざまな国の観光客が訪れており、外国人観光客の受け入れノウハウが優れていることが高い評価を受けていた。午後からは、南城市のおきなわアウトレットモール「あしびなー」を取材。あしびなーの概要や外国人観光客の受け入れ状況の説明を受け、その後各自で自由取材。あしびなーでも中国人社員を雇用しており、今回も通訳や案内を務めた。沖縄や観光についての知識は十分でなく、同行の沖縄の現地ガイドに教えを請う場面も見られた。

中国人観光客が増加するなか、中国語表記の次に求められるのは、統一した観光ガイドの用語や、中国人観光客に関心を持ってもらえるガイドの内容。単純な説明や紹介の中国語訳では、関心や満足が得られなくなってきている。

周辺に大型家電量販店もあったことから、そちらにまで足を延ばす記者もいた。以前程店舗かで100や1000といった大量ロットが用意できる商品をMICE用としてラインアップすべきとアドバイスがあった。

夕方から西海岸に移動。

ANAインターコンチネンタル万座ビーチリゾートでは、ジャンマーク・ポリ総支配人が自ら出迎え、中国メディアに同ホテルの概要、リゾートウエディングやMICEへの取り組みなどを説明した。

夕食は、同ホテルの日本料理レストランの「雲海」。今回のメニューもリーズナブルながら、本格的な日本料理を取材、楽しめたと好評だった。一部の参加者は生魚を食べる量を少なくした。やはり海外旅行なので、生ものは少し怖いということだった。黒毛和牛のステーキは非常に好評だった。夕食後は、ホテル内のセレクトショップも取材。ホテル内のショップは安心して快適に買い物ができるとのことだった。

2月29日行程

29日は、ANAインターコンチネンタル万座ビーチリゾート内のチャペルと近隣のチャペルの2カ所を取材。ワタベウエディングからは中国人のスタッフが説明についた。中国からのカップルは、結婚式でなく、半年ほど前に行われる記念写真の撮影に訪れているケースがほとんどという。中国では慣習的に、結婚式の前に記念撮影を行う。大量の写真を撮影するのも特徴となっている。

また中国では、8のつく日が縁起が良いとされており、8のつく日は中国内でもホテルの宴会場は、会社のパーティーなどで予約がいっぱいになるので、結婚式は後回しの扱いになるという。また海南島がトップシーズンで、観光客がいっぱいになることもあるので、単純な競争でなく、中国の事情を知った上で上手く沖縄のオフシーズンと合わせるなどして、誘客を図るべきだと中国メディアからアドバイスがあった。その後は、沖縄観光コンベンションビューローに移動し安里繁信会長と中国メディア関係者の意見交換会が行われた（意見交換会記事参照）。

意見交換終了後は、国際通りに向かい、牧志公設市場へ。店先に並ぶ沖縄ならでは亜熱帯の魚介類に驚き、また2階の食堂では、実際に食べた。他にもサータアンダギーなど沖縄独特のお菓子にも関心が寄せられた。昼食後は、自由取材として、泡盛の歴史や製法の説明を受けたほか、試飲も行った。

同行の旅行業者の感想を聞く

羅　明暁氏
上海中国青年旅行社社長付

羅氏は、上海で日本への旅行を企画販売する専門家として、別途意見を聞いた。羅氏は、「何度も沖縄に訪れているが、今回初めてのところが多く、しかも沖縄を代表するところばかりだと聞いて驚いている。モデルコースの想定費用は聞いているが、私としては同じような内容で、8万円～9万円台で訴求力のある旅行商品を造成してみたい」と話す。

「現状は、会社としては上海の大きなMICEの営業を中心に行うように指示されているが、それに付随して経営者の個人旅行や経営者同士のグループ旅行も扱うので、個人旅行の中間層以上を対象にした施設にも関心がある」

「注意して欲しいのは、中国から日本の旅行会社や旅館ホテル、ブライダル企業のホームページが閲覧できることを知って欲しい。国内の料金が安くて、我々の取り扱う料金が高いと顧客からクレームを受ける。日本の国内商品と外国人向けのラウンドやオプショナルツアーの共通化を図るべき」と現状の問題を指摘した。

中国人観光客の変化

今回の同行取材で分かったことは、①上海からの観光客の要求が先進国からの観光客並みに変化していて、そのスピードが速いこと。②ゴールデンルートは、粗悪ツアーを量産したので、日本への旅行は、すでに安物旅行というイメージになっている。

中間層は欧米にも海外旅行を始めてしまった。同行の中国メディアだけでなく、、地元沖縄の台湾人ガイド、取材先の企業や施設で働く中国人スタッフに話を聞くと同じような答えだった。

中国人観光客の大量の買い物様子は、すでにステレオタイプ化して、観光の関係者でなくても知っている風景となったが、それはもう過去のものになりつつある。安くて高品質がメイド・イン・ジャパンの商品なら、訪日旅行も安くて満足度が高いものがメイド・イン・ジャパンツアーのはず。中国人の中間層以上からは、質の高い真のメイド・イン・ジャパンツアーが求められている。

世界文化遺産首里城を取材する中国メディア

巨大なクジラが飛び跳ねる

サンゴを使った染め物を体験

快適なグラスボート

琉球王朝料理を取材

外国人観光客に人気が高いスーパーエイサー

中国人留学生が植樹したマングローブ

リゾートウエディングに関心

西海岸のリゾートホテルはMICEも受け入れ

羅　氏

12年度ビジットおきなわ計画案発表

沖縄県は3月13日、12年度のビジットおきなわ計画案を発表した。ビジットおきなわ計画は、長期計画「沖縄21世紀ビジョン基本計画（仮称）」や沖縄県観光振興計画に基づいて07年度から年度ごとに策定している観光客の誘致行動計画。

12年度の観光客数は11年度見込み比10・7%増の620万人に設定。観光収入目標を11年度見込み比21・8%増の4700億円。とくに県が誘客に力を入れている外国人観光客数は、11年度見込み比50%増の45万人。

また、計画案では12年度から、観光客数×宿泊数で求める「人泊数」の項目を設定。11年度見込み比17%増の1840万人泊とした。観光客1人当たりの消費額は、11年度見込み比87%増の7万5千円。平均滞在日数は0・12日増の3・95日。

12年度の目標を達成する施策として、①チャーター便の誘致などによる交通アクセスの拡充・強化、②海外旅行市場における認知度向上③離島観光の推進、④沖縄ブランド力の強化、⑤観光客の受入体制整備が挙げられている。

目玉のひとつが、新石垣空港13年3月共用開始。2千メートルの滑走路がある本格的なジェット化空港。国内、海外からの観光客拡大が期待されている。ビジットおきなわ計画でもインバウンドに注力した。

ビジットおきなわは、入域観光客数、滞在日数、観光消費額を設定し、満足度の向上も図るアクションプラン。観光立県として、観光産業による地域振興を行うモデルのような施策となっている。観光客数を求めるあまり、格安ツアーになったり、地元の観光関係者にとってマイナスになるような施策を行わないのが特徴と言える。さらにインバウンドが好調とはいえ、9割を占める国内観光客誘致にも取り組んでいる。観光客数1千万人を目標としているので、国内の競争は激しさは増すが、従来通り国内観光客を拡大させ、インバウンドはさらに大きく拡大させる必要がある。

沖縄の観光客数は、11年の1年間でみると、588万8800人。外国人観光客はその内28万人で約5%程度。震災と原発事故の影響がありながら、マルチビザの効果か、前年比で、4千700人減で済んでいる。09年と比較すると4万5200人も増加している。11年の国別は、台湾11万3千人、韓国2万2700人、中国本土3万3千人、香港5万1200人、その他は6万100人。歴史的に元々台湾からの観光客が多い沖縄ながら、韓国より中国本土が多くなっている。また中国本土と香港を合わせると8万4200人と台湾に迫るほどの伸びとなって来ているのがわかる。

今後の沖縄のインバウンド拡大のカギを握るのは那覇空港。那覇空港は、国内線、国際線ともにいっぱいの状態。第2滑走路工事の準備は進んでいるが、今回参加の中国メディア関係者からは、国際線ターミナルビルの経年劣化が著しいことが指摘された。インバウンド拡大には、沖縄は国内観光客誘致と同じで、航空路線か、クルーズ船の誘致が必要。インバウンド拡大が見込まれている現状では、那覇空港の整備が急務となっている。

新石垣空港13年3月供用開始
離島観光の振興に大きな弾み

インバウンド振興のカギ
沖縄マルチビザ（数次査証）

昨年7月、日本政府は、中国人観光客向けに「沖縄マルチビザ」の発給を開始した。「沖縄マルチビザ」は「数次査証(ビザ)」の通称。中国人の富裕層が対象で、年収約25万元以上、日本円でおよそ300万円程度。1度の発給で3年以内なら何度でも日本に訪れることができる。1回の滞在は最長90日間。年間では180日間まで。初回の滞在時には最低1泊以上、沖縄県内で宿泊しなければならない。2回目以降は、日本のどこからでも入国することができる。日本政府が観光を目的で入国する外国人に対してマルチビザを発給するのは今回が初めて。

また、観光以外でも、親族や友人訪問、遊学などさまざまな活動も、日本訪問の目的として認められる。

沖縄県知事は震災以前に、中国人個人観光客を対象としたビザ免除措置を提出していた。

中国人向けの個人観光ビザ（査証）は、11年9月1日から発給要件を緩和。従来、経済力のある企業や政府機関の中堅幹部以上に発給を限定していたが、今回は職業の要件を外し、一定の経済力があれば発給。また滞在期間も15日から30日に延長。年収10万元程度（約124万円）以上の「十分な経済力」が発給要件。

北京路線は11年7月末に就航した海南航空に加え、今年中国国際航空による北京～沖縄の定期便が就航。上海路線は既存便である中国東方航空による上海～沖縄間の毎日運航が予定されているなど、インセンティブツアー開催の機運が高まっている。

中国メディアと安里会長が意見交換

沖縄インバウンド座談会 出席者（順不同）

沖縄観光コンベンションビューロー会長
安里 繁信氏

上海師範大学元校長
楊 徳広氏

評論家、著述家
邵 伝烈氏

「中国工商時報」浙江省駐在事務所主任
万 潤龍氏

「新民晩報」旅游欄編集担当責任者、作家
楊 暁暉さん

無錫日報報業集団「無錫日報」首席記者兼カメラマン
薛 中卿氏

日中旅游ビジネス情報センター代表
岡本 義正氏

沖縄は観光で架け橋となる
ビザの緩和の基準を実情に
海外旅行先として比較される
中国語でネット予約を可能に

安里　**邵**　**楊**　**万**

安里氏

邵氏

楊氏

万氏

楊さん

岡本氏

薛氏

岡本　今回は中国、上海のメディア関係者に、ホワイトカラー以上を対象とした沖縄観光のモデルコースを視察、取材してもらい、情報発信を行って貰う。同時に中国からホワイトカラー以上の観光客が日本・沖縄にさらに訪れてもらえるようなアドバイスしてもらう。個人的には、日本の情報発信は上手くいっていないように感じる。中国メディアで情報発信できる今回の参加者のような層にあまりにも日本の情報が知られていない。沖縄観光コンベンションビューロー（OCVB）は、沖縄観光の推進母体であり、安里会長は民間からの出向で、沖縄の次世代のリーダーと伺っている。この機会に中国メディアのメンバーと意見交換を行って貰い、沖縄観光の発展につなげてもらいたい。

邵　今回、岡本氏の考えに共感し参加した。沖縄は済州島と似ていると感じたが沖縄の方が見どころが多いと思う。上海から飛行機で1時間30分。こんなに近いのに私は70歳になるが沖縄のことを詳しく知らなかった。上海の人口は、2300万人。一万人にひとり、来れば2300人。もっと宣伝をするべき。今回の参加者が帰国し、各メディアで紹介することで、もっと沖縄に観光客が訪れるようにしたい。リゾートウェディングの取材でワタベウエディングでも聞くことができたが、若い人に来てもらいたいなら、ビザが問題。もっと手続きを簡単にすること。ビザ発給の費用も安くなればよい。ホワイトカラーの月収は2万元で、日本円で25万円程が多い。

安里　マルチビザについての評価は。また済州島と比べて、どこが優れていると思われたか。

邵　年収25万元という制限が高い。実情に合わせた発給緩和が必要だ。月収はさほど多くなくても資産を持っているホワイトカラーは多い。月収や年収だけでなく、資産にも着目すべき。沖縄は済州島と比べると、文化的なものが優れている。首里城など世界文化遺産がある。テーマパークのおきなわワールドの国の有形登録文化財の古民家も素晴らしかった。美ら海水族館は世界一で、途中の海洋博記念公園で開催されていた花のイベントの巨大な花の装飾も素晴らしかった。半日以上滞在できるところが多い。

楊　訪日は9回目。東京よりは静かで、奈良のような古さもなく寺も少ない。

沖縄には、独特の文化を感じた。これは琉球文化、中国の大陸文化と日本の文化がミックスされた特別なものなのかと思う。

沖縄が中国からもっと多くの観光客を望む場合「比較されること」を意識する必要がある。私は、沖縄は若い人に向いていると思う。中国国内だと海南島。海南島は国内だが時期によっては料金が高くなる観光地。中国からの海外旅行は、アメリカなら2万元、ヨーロッパは1万5千元、日本は1万元。一万元は13万円ぐらいだ。

安里　沖縄は、小さな国であったので、さまざまな国と外交を続けてきた歴史がある。日本や中国、アメリカ統治下の時代もあり、それをチャンプルー文化と呼んでいる。私の家業は、実は空手。ルーツは中国の福建省にある。そこに沖縄の人が渡り学んで戻り伝えた。あらゆるものが交易として成り立ち続いている。

日中国交正常化40周年の節目の年。沖縄は観光を軸に架け橋となりたいと考えている。人流を作っていきたい。交流が友好を育む。沖縄に来てもらい、もてなし、ありがとうと言ってもらい、こちらも中国に訪ねて、お礼を伝える関係を目指したい。懸け橋の考えは、沖縄に伝わる万国津梁という言葉意味そのもので、その精神が我々のミッションとなっている。私は上海に年3回は訪れている。

楊　懸け橋とは、良い言葉で素晴らしい考え方だ。上海は北京まで2時間掛かる。沖縄の方がずっと近い。

万　プーケットに行く中国人が多い。プーケットは中国への誘客が盛んなところで、ゴルフ旅行でセールスしている。プーケットのゴルフ場は、中国語で中国からネット予約できるぐらい発達している。沖縄は44カ所もゴルフ場があると聞いて驚いた。ゴルフ場に中国語のホームページはあるのか、すでに中国からネットで予約できるのか。

安里　県内のゴルフ業界がインバウンドに関心を持ったのは今年から。これまでは、県内ゴルファー、その次は国内観光客だった。沖縄の観光客数約600万人の95%が国内観光客。すでに国内向けでは一年中ゴルフのオンシーズンということで周知できており、富裕層のゴルフ旅行市場を作っている。中国向けは本格的な取り組みがスタートしたところ。

万　中国は豊かになってきている。ゴルフの愛好家は数十万人。日本のマスコミが取り上げるのは中国内では超富裕層。ゴルフを楽しんでいるホワイトカラーや会社経営者などの一般的な富裕層をもっと取り込むべきだ。

安里　今年上海のゴルフ協会の関係者を招へいした。またゴルフ雑誌やテレビでも紹介してもらった。3月最初は国内の大型ゴルフトーナメントが開催される。12月には大きなゴルフトーナメント開催もきまっている。沖縄のゴルフ場のレベルの高さを中国に情報発信していきたい。

楊さん　仕事柄グアムなど多くの島々への取材に出かけている。そういった島には、戦跡も多い。我々も昔のことや古いことに興味がある。今回は見学できなかったが「平和の礎」を見てみたい。今の沖縄の若い人の楽しそうな姿の人々が印象的で、歴史をどうとらえているか聞いてみたい。

安里　沖縄は平和の大切さを伝えていくことが使命の島だと考えている。沖縄は修学旅行生が昨年過去最高の45万人となった。日本国内でも学生が沖縄で平和の大切さを学ぶということは定着している。嬉しいことに中国から修学旅行に訪れたいとの問い合わせをたくさんもらっている。ただ来てもらうだけでなく、こちらも国際交流など受け入れできる学校を探しているところ。できるだけ早く中国からの修学旅行を実現したい。

万　沖縄の本土復帰はいつか。

安里　1972年の5月15日。

万　例えば1ヵ月前に平和を記念して、沖縄と中国のカップルなど、既婚、婚約中など平和と交流に貢献しているカップルとして、チャペルでセレモニーをおこなってはどうか。もちろん中国メディアもまきこんで大きなイベントにするべきだ。

安里　今年の復帰40周年記念のイベントに関しては、準備中なのでその意見を参考したい

薛　私は、このメンバーで一番若くもあり、簡単に話したい。私は上海や、浙江省と一緒に揚子江デルタ地域を形成している江蘇省から来た。揚子江デルタ地域は経済が発達しており、中国全土でGDPが一番高い。こういった特別な地域に関しては、特別な観光コースを考えて欲しい。個人の記念撮影ツアーや、熟年夫婦、40代から50代をターゲットにした取り組みをしてはどうか。

安里　ハッピーアイランド沖縄という、記念日に合わせて沖縄を旅する旅行を国内ではPRしていて、好評だ。これを中国でも展開すればよいと理解した。

岡本　20年ぐらい中国と関わってきている。沖縄は特別な地域とは思うが、彼らが喜んでくれているのはまちがいない。彼らの視点で、関心のもったところを、様々な紙面を通じて読者に伝えてくれる。旅行という切り口だけでなく、経済ニュースや文化、料理といった面で沖縄を紹介してくれるだろう。

安里　最後にみなさんに伝えたいのは、5年先10年先の沖縄の観光をたのしみにしていただきたいということ。我々が未来の沖縄を創っていくことになる。本日はありがとうございました。

平和のシンボルを見学したい
揚子江デルタ地域を視野に
様々な情報発信を効果的に

岡本　**薛**　**楊**

意見交換会 出席者紹介

安里繁信・沖縄観光コンベンションビューロー（OCVB）会長
安里会長は、総合物流業、広告業、飲食事業などを傘下に置く企業グループのシンバホールディングス（13社）の最高経営責任者。04年に最年少で県教育委員に就任、09年に日本青年会議所（JC）会頭を務めた。沖縄の次世代を担うリーダーとされる。

楊徳広氏
楊氏は、上海師範大学元校長。中国高等教育学会副会長、上海市高等教育学会副会長、上海老年大学顧問を務めている。

邵伝烈氏
邵氏は、呉興人のペンネームで活躍する上海の著名な評論家で、著述家。メディア企画者でもある。

万潤龍氏
万氏は、知非をペンネームに、「中国工商時報」浙江省駐在事務所の主任を務める。中国国内で何度も優秀記者として評価され、上海市、浙江省記事賞、全国優秀内部参考記事賞などを受賞。人民日報、光明日報、文匯報、羊城晩報などの国内や海外向けの新聞に記事が発表されている。

楊暁暉さん
楊さんは、南妮をペンネームに活躍する新民晩報の編集担当責任者。中国作家会員であり作家として多くの小説や短編集も発表している。

薛中卿氏
薛氏は、無錫日報報業集団の無錫日報の首席記者。無錫日報新聞撮影部の副主任、絵南健康保険報副総編集を務めている。記者と力メラマンの両面で高い評価を得ている。

羅明暁氏
羅氏は、上海中国青年旅行社社長付を務めている。日本語に堪能で、観光や旅行のビジネス用語のスキルが高い。日本の観光関係者と話す姿は、国内の旅行業者かと思わせるほど。座談会では通訳を担当。

岡本義正氏
岡本氏は、日中旅游ビジネス情報センター代表で、上海市観光局日本市場の首席顧問を務める。元JTB中国旅行取締役大阪支店長。近年は中国からの観光客誘致についての講演や相談の依頼が多い。

問い合わせ先は
（財）沖縄観光コンベンションビューロー
〒901-0152　沖縄県那覇市小禄1831-1　沖縄産業支援センター2階
TEL.098-859-6127
沖縄観光情報ウェブサイト「おきなわ物語」http:www.okinawastory.jp/
東京／東京都千代田区有楽町2-10-1　東京交通会館3階　TEL.03-5220-5311
大阪／大阪市北区梅田1-1-3-2100　大阪駅前第3ビル21階　TEL.06-6344-6829
韓国／ソウル特別市中区清渓川路40番地　韓国観光公社10階　TEL.001-822-318-6330
台湾／台北市中山區松江路148号4楼E室　TEL.001-886-2-2541-1011

今回中国メディアが取材した
沖縄紀行記事（原文）は
http://shanghai-gate.com/inbound/20120327.html
上記アドレスから閲覧できる。